

Title	知の喪失 : 意味記憶とその障害
Author(s)	吉野, 文浩
Journal	歯科学報, 110(1): 2-3
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/1209">http://hdl.handle.net/10130/1209</a>
Right	

## 知の喪失－意味記憶とその障害

吉野文浩

市川総合病院精神科

### はじめに

今日、高齢化社会の到来とともに認知症の増加が社会全体の問題としてクローズアップされている。認知症の症状としては、新しいことを憶える記憶の障害である記銘力障害がよく知られているが、記銘力障害だけでは認知症は生じない。人間のこころとは知・情・意から成り立つものとすれば、認知症は謂わば、知が喪失した状態である。知は知識だけを意味するものではないが、知識は知の中核であり、この知識を担う高次脳機能が意味記憶(semantic memory)である。認知症という言葉が含む認知とは知ることの活動<sup>1)</sup>であり、モノを知るために重要な記憶が意味記憶である。

市川総合病院精神科研究室では、これまで意味記憶の障害について研究を行ってきた。そこで本稿では、意味記憶とその障害について概説するとともに、比較的稀な疾患のため医療関係者の間にもあまり知られていないが、臨床神経心理学上重要な疾患であり、意味記憶障害が非常に鮮明な形で出現する semantic dementia<sup>2)</sup>(意味認知症)について述べたい。

### 意味記憶とは

Tulving<sup>3)</sup>は貯蔵される情報の内容に基づき記憶を分類している。それによれば、意味記憶とは言葉やイメージとして意識にのぼる宣言記憶に属し、単語の意味や記号など客観的、体系的な知識の記憶である。同じ宣言記憶に属し「いつ」「どこで」「何をした」というエピソード記憶と異なり、初めてその知識を学習した時の時間的、空間的な刻印が消失し、辞書のように普遍化しているのが特徴である。Tulvingによる意味記憶の定義は当初、言語の水準に限定されていたが、実際の物品や人物、色なども知覚的表象にとどまらず、何らかの意味が付与されていることから今日の認知心理学では、意味記憶と

して扱われる。

たとえば、レモンが如何なるものであるかという知識は意味記憶の一つである。私達は幼い頃、初めてそれを口にした時、誰もがその酸味に驚いたことと思われる。また直に見て触り、それが黄色く、あのような形状であることを知ることとなる。さらに、それがレモンという名前をもつ果物の一種であること、その絞り汁を紅茶に入れたりすることを誰かに教えられたはずである。その後も同様の体験が繰り返される中で、レモンという言葉や実物の様子、その知識はいつしか意味記憶として大脳に深く根ざし普遍的な知識になったと考えられる。

### 意味記憶の障害

イングランドの Warrington<sup>4)</sup>は大脳皮質に萎縮を有し、従来の症候学で言えば、連合型視覚失認に該当する3症例の語や画像に対する認知能力を詳細に検討し、選択的に意味記憶が障害されることをはじめて報告した。これらの症例はたとえば、言語的あるいは視覚的に何かの花が呈示されても、野菜や果物と区別可能でも同定出来なかった。このような語や絵に対する知識の障害は言語障害、全般的な知的能力の障害、それまでの既知の認知障害では説明困難であり、意味記憶の障害のために生じていると結論された。そして、このような選択的意味記憶障害例の存在は Tulving により意味記憶が記憶分類の中で独立して位置づけられることの妥当性を裏付けることになった。

意味記憶は語や実際のモノに対する認知の基礎を形成するものであるから、対象の認知には少なからず意味記憶が働くといってよい。したがって、意味記憶に障害が存在すれば、何らかの対象の意味理解に必ず障害が発生するが、対象の意味理解が障害されているからといって、意味記憶障害が存在する訳ではない<sup>5)</sup>。意味記憶障害を明らかにするために、個々の概念やモノに関する意味記憶を一つ一つ

確かめる作業が必要である。具体的に言うと、被験者に出来るだけ多くの知覚様式を介して、対象となる概念やモノに関する情報の入力を行い、さらに多様な反応様式を用いて被験者の意味記憶からの情報が出力されるように検査することが必要である。このような情報の入力と出力の間に意味記憶が介在していると考えられる課題の全てに障害が見られた場合、その障害の原因を失語や失行、多様式に横断的な失認ではなく、共通する認知システムである意味記憶に求めることができる。

### Semantic dementia

Semantic dementia<sup>2)</sup>とは側頭葉の極を含む前方から側頭葉底面を中心とする限局性萎縮例にみられる意味記憶の障害を主体とする特異な進行性の病態である。認知症変性疾患の中でアルツハイマー病、レビー小体型認知症の次に多いとされる前頭側頭葉変性症の亜型の一つに分類され、マクロ病理学的には古典的にPick病に属する。

その臨床像は非常に鮮烈である。自験例<sup>6)</sup>では、たとえば、電話とは何か尋ねても「電話って何ですか?」と返答され、実際の電話を見せても、電話という名前を持った道具であるとわからず、実際に触れさせてみても、それを使うことすら出来なかった。しかし、日常生活はまだかなり保たれていて、けっして重度の認知症と診断されるレベルではなかった。

Semantic dementiaでは、語義理解が障害された単語であっても、その語の復唱は可能であり、統語や統覚に障害はなく、注意力、数唱、見当識、日常の近時記憶、視空間構成機能、数概念や計算<sup>7)</sup>、最近の自叙伝的記憶など多くの非意味的認知機能は保持される<sup>8)</sup>。失行の合併はないがジェスチャーやパントマイムによる記号的なコミュニケーションにも障害がみられることがある。疾病意識ないし病感は多少伴うものの、障害に対する深刻味がなく病識を欠く。特徴的なことは、先の自験例のように中等度の病期まで、買い物、自動車運転、料理などの複雑な生活動作も表面上はあまり支障なく行えている場合が多いことである。

### アルツハイマー病との鑑別点

Semantic dementiaの診察では、アルツハイマー病との鑑別が重要である。両者はエピソード記憶と

意味記憶の一方がより障害されるという点で対照的な関係にある。つまり、アルツハイマー病では意味記憶よりもエピソード記憶の障害が目立ち、semantic dementiaではエピソード記憶よりも意味記憶の障害が目立つ<sup>9)</sup>。また、遠隔記憶についてみると、両者の間には記憶障害の程度から生じる時間勾配にやはり対照的關係が認められる。つまり、アルツハイマー病では、昔の記憶が最近の記憶よりも想起されやすいが、semantic dementiaでは、最近の自叙伝的記憶の成績が良好である<sup>10)</sup>。また、呼称検査において、semantic dementiaではアルツハイマー病のような“Tip-of-the-tongue”現象やキュー効果も認められない。Semantic dementiaとアルツハイマー病の意味記憶障害の質的な違いについてはさまざまな議論があるが、筆者らは前者では意味記憶のアクセス障害が、後者では意味記憶のストア障害が生じると報告している<sup>6)11)</sup>。

### 文 献

- 1) Neisser, U.: 認知の構図—人間は現実をどのようにとらえるか, Cognition and Reality—Principles and Implications of Cognitive Psychology(古崎 敬, 村瀬 旻訳), サイエンス社, 東京, 1978.
- 2) Snowden, J. S., Goulding, P. J., Neary, D.: Semantic dementia: A form of circumscribed cerebral atrophy. Behav Neurol 2, 167~182, 1989.
- 3) Tulving, E.: Elements of episodic memory, Clarendon Press, Oxford, 1983. (太田信夫, 訳: タルヴィングの記憶理論, 教育出版, 1985.)
- 4) Warrington, E. K.: The selective impairment of semantic memory. Q J Exp Psychol, 27: 635~657, 1975.
- 5) 吉野文浩, 加藤元一郎, 鹿島晴雄: 意味記憶障害の臨床的評価法. 脳と精神の医学, 7(4): 461~466, 1996.
- 6) 吉野文浩, 加藤元一郎: アルツハイマー型痴呆の意味記憶障害—障害構造の分析と意味痴呆—選択的意味記憶障害例との比較. 高次脳機能研究, 23(2): 119~129, 2003.
- 7) Diesfeldt, H. F. A.: Progressive decline of semantic memory with preservation of number processing and calculation. Behav Neurol 6, 239~242, 1993.
- 8) Snowden, J. S., Neary, D., Mann, D. M. A.: Fronto-temporal lobar degeneration: Fronto-temporal dementia, progressive aphasia, semantic dementia, 3~104, Churchill Livingstone, Edinburgh, 1996.
- 9) Hodges, J. R., Garrard, P., Patterson, K.: semantic dementia, PICK'S DISEASE AND PICKCOMPLEX, 83~104, Wiley-Liss, New York, 1998.
- 10) Hodges, J. R., Graham, K. S.: A reversal of the temporal gradient for famous person knowledge in semantic dementia: implications for the neural organisation of long-term memory. Neuropsychologia 36, 803~825, 1998.
- 11) 吉野文浩, 大川原浩, 鹿島晴雄: 記憶と認知機能, 精神疾患と認知機能, 48~54, 新興医学出版, 東京, 2009.